HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	江戸時代後期における東蝦夷地のアイヌ集落（一）
Author(s)	小林，和夫
Citation	北海道大学人文科学論集，24，21-55
Issue Date	1986-03-17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34381
Type	departmental bulletin paper
File Information	24_PR21-55.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

江戸時代後期における東蝦夷地のアイヌ集落（一）

小林　和夫

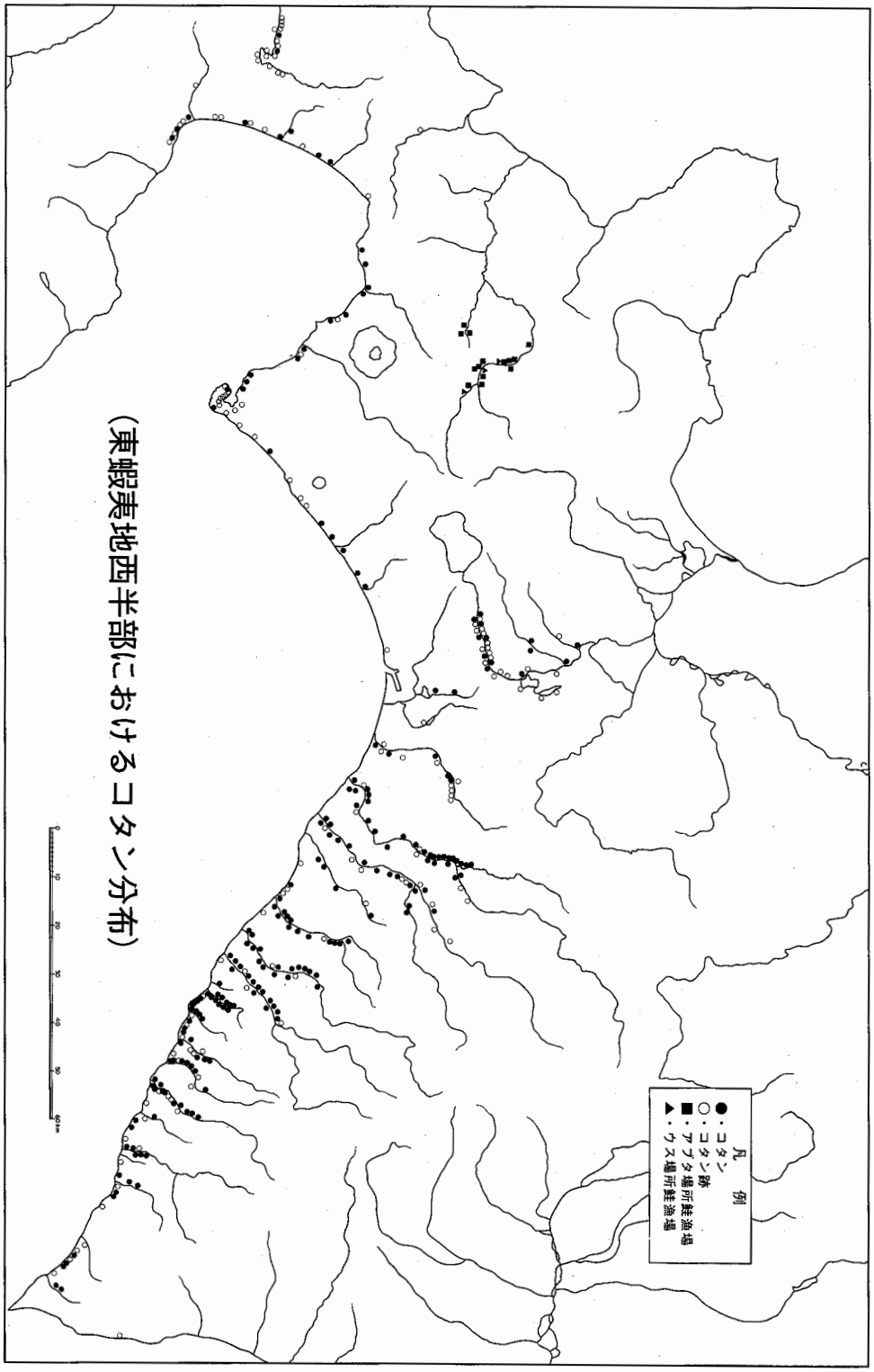
はじめに

本稿は東蝦夷地のコタン（アイヌ集落）の分布を明らかにすることを最終目的としているが、今回はその(一)として、東蝦夷地一八場所中、ヤムクシナイ場所からホロイツミ場所までの一四場所を取り上げる。なお、資料の制約から、今日、アイヌの本来の生活がどのようなものであったのか、また、コタンがどのように分布していたのかを詳しく知ることができない。我々が知り得るのは、和人に支配され、使役されるようになってからの、主として文化期、安政期のアイヌの生活であり、コタン分布である。したがって、本稿の考察時期は文化期、安政期に集中している。

本稿の考察範囲は、コタンが海岸に分布する地域と、川筋に添って上流へと分布する地域とに大別できる。かりに、前者を海岸型、後者を内陸型と呼ぶが、この分布型の相違が何によって生じたのかを探るのも本稿の狙いの一つである。もっとも、これらについては、全蝦夷地を考察してから論ずべきものであり、今回は、当該各場所のアイヌの生活、コタン分布を知ることに重点が置かれる。

これらの考察に有用な資料としては、文化期には『東蝦夷地各場所様子大概書』（以下『大概書』と略記）があり、これは『新北海道史　第七巻』所収のものを用いた。また、安政期には松浦武四郎の『竹四郎廻浦日記』[一]（以下『廻浦日記』と略記）、『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』[二]（以下『丁巳日誌』と略記）、『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』[三]（以下『戊午日誌』と略記）がある。

各場所の「コタン・コタン跡一覧」表は、前記の資料によって作成されているが、『蝦夷渡海記』（文化六年、高麗麟平著、函館市立図書館蔵、以下『渡海記』と略記）、『蝦夷全図』（国立国会図書館蔵）、『入北記』（安政四年、玉虫左太夫著）など、一部他の資料も用いて



（東蝦夷地西半部におけるコタン分布）

ある。

コタン分布図は、筆者作成（未発表）の『東西蝦夷地のコタン分布図』（安政期）より、本稿関係部分を抄出したものである。

なお、資料中のアイヌ集落には、記録方法によって二種がある。その一つは、一、あるいは数箇の小集落を包括している村であり、いま一つは、小集落そのもので、アイヌ自身がコタンと呼んでいたものである。しかし、差し支えのない場合は、それらを使い分けずに、単にコタンと呼んでいる。

（一）　ヤムクシナイ場所

『渡海記』によると、文化六（一八〇九）年の戸口は一〇五軒五二〇人であり、コタンは一五コタンで、その分布は海岸に一四コタン、川筋に一コタンである。各コタンの戸数と人数は第一表の通りであるが、戸数と人数が記されているのは一四コタンについてだけであり、それらの合計で一〇五軒五二〇人になる。ムクンヌイにはそれらが記されていないが、しかし、「夷家あり」である。『大概書』[四]では各コタンのそれらを記さず、一様に「夷家あり」であり、ムクンヌイも同様である。ムクンヌイの扱い方が難しいが、「夷家あり」＝コタンという本稿の方式にしたがってコタンとしての扱いをしている。以下の各場所でも、このような場合には、断らずにコタンとしての扱いをしている。

安政期の戸口は、安政三（一八五六）年が八四軒三七四人（『廻浦日記』[五]）、同四年が二軒二人増加しての八六軒三七六人（『入北記』）、同五年が、六軒一七人を増加しての九二軒三九三人（『野帳』[六]）である。

安政三年のコタン数は八で、その分布は海岸に七コタン、川筋に一コタンである（『廻浦日誌』、『丁巳日誌』[七]）。同四、五年のコタン数は六で、その分布は海岸に五、川筋に一（『入北記』、『野帳』）である。なお、安政三年のコタン数を八と記したが、『廻浦日記』に記されているものをそのままに数えると七コタンである。しかし、『廻浦日記』には「夷家三軒有し由なれ共、今はなし」と記されているシラリカが、『丁巳日誌』には「此処むかしより夷家五、六軒有しと」と記されている。『丁巳日誌』の「むかしより」との記述を採用し、安政三年のコタンの数を八とした。また、安政三年と四年のコタン数には違いがみられるが、これは四年に二コタンが消滅したということではなく、三年はコタンで、同四、五年は村で記録されていることによる。

『廻浦日記』のコタン戸数の合計に『丁巳日誌』のシラリカの戸数を加えても、安政三年の総戸数八四軒に六、七軒不足する。『廻浦日記』の基礎資料『野帳』には、村単位の人別帳をコタン単位にしようと試みたらしい書き込みがある。筆者には理解し難いものの、その書き込みから推測すると、『廻浦日記』が記すコタンの戸数には何らかの根拠があるらしい。

安政三・四年に記録されているコタン跡は海岸に九ヶ所、ユウラツフ川筋に一ヶ所、トシベツ川筋には一一ヶ所も見られる（『廻浦日

第一表　ヤムクシナイ場所コタン・コタン跡一覧

資料	大概書		渡海記		蝦夷全図	廻浦日記		丁巳日誌		入北記		野帳	
コタン(跡)	戸数	人数	戸数	人数	コタン	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数
ユウヲイ	○		11	52		△11							
ヤムクシナイ	○		7	36	○	7				10	44	6	29
フヨベ						△							
ヲコツナイ	○		5	29	○	△ 5							
ハマナカ	○		4	15		4							
ユウラツフ	○		14	67	○	14				24	108	28	126
ヘタヌ						△							
フイタウシ	○		2	11	○	△ 3							
ヤマサキ	○		2	10	○	△ 2							
シラリカ	○		3	14		△ 3		5,6		8	26	3	15
クン子シユマ					○	△ 2							
ホロナイ	○		5	27	○	△							
モクン子	○		○		○	△							
クンヌイ	○		11	48	○	2	10			2	13	4	13
下サカイマツフ	○		4	32		△		△					
フイラウシナイ								△					
カ子カルハツタリ						△		△					
ヘンケサカイマツフ						1		1	4	6	28	1	9
ヘツカシバウシ								△					
サフニハツタラ						△							
サツテカハツタリ						△		△					
イリルケ								△					
フムンセナイ						△							
ウトラシウム								△					
ホンヒラヲマナイ								△					
ホンヒラ						△ 2		△					
ワリウ	○		6	27	○	△ 6							
モンヘツ	○		11	65	○	11							
ヲシヤマンベ	○		20	87	○	33				36	157	50	201
トツタベツ					○								

備考　○：戸数不明コタン　△：コタン跡　以下の各表も同じ

記』、『丁巳日誌』[八]。

海岸のコタン跡九ヶ所は、その七ヶ所が文化期のコタンであったが、他の二ヶ所については、いつ頃のコタンであったのか不明である。川筋のコタン跡も、全てがいつ頃のコタンであったのか不明であるが、トシベツ川筋のホンヒラと下サカイマツフの二ヶ所のみは文化期頃のコタンであったかもしれない。安政四年、ヘンケサカイマツフに居住するイヌマカシの話によると、『曾祖父の代にはホンヒラに住し、其後西地と境目相立候後はハンケサカイマツフ（引用者註　下サカイマツフ）へ家をうつし」（『丁巳日誌』）たということである。東西蝦夷地の境界が定められたのは前幕府時代の初め、文化期初め頃のことであったので、この文化期初め頃にホンヒラがコタン跡となり、下サカイマツフが新生のコタンとなったと考えられるからである。

寛文一〇（一六七〇）年頃の本場所は、ユウラッフが「商場」、戸数七軒、「おとなハハ」、クンヌイが「商場」、「おとなバルフレ」、モンヘツが戸数五軒、「おとなマシマ」、ヲシヤマンベが戸数五、六軒、「おとなアマリ」であった（『津軽一統志』巻十、市立弘前図書館蔵）。ユウラッフ、モンヘツ、ヲシヤマンベには戸数が記されているので、コタンであったことが明白であるが、クン子シュマ、クンヌイには戸数が記されていないので、コタンであったのか、どうか不明である。しかし、クンヌイは「おとな」（首長）名が記されているので、戸数は記されていないがコタンであったと考えて良いであろう。

なお、これらのコタンは全てが海岸、そして川端に位置している。資料名は省略するが、これらのコタンが位置している川の全てに鮭鱒が遡上している。元和八（一六二二）年の『蝦夷国報告書』[九]に「彼等は山の近くに住み、且つ海に於いて漁猟する」とあるが、寛文期の彼らの生活が、この海漁にどの程度依存していたのか不明である。我々が知るもう少し後のアイヌは、川漁に大きく依存していて、海漁にはほとんど依存していなかったかのごとくである。寛文期のコタンの全てが鮭鱒の遡上する川にのみ位置していたことからすれば、住民はそれらの川に遡上する鮭鱒に大きく依存し、コタンの立地も鮭鱒遡上の有無に規制されていたのでなかったろうか。

文化期になると、寛文期のこれらのコタンの戸数は二倍、あるいはそれ以上に増加している。これは一四〇年という年月をかけて増加したと見ることも可能であり、また、その方が自然であるように思われる。しかし、『東西蝦夷場所境取調書上』（松浦武四郎、北海道大学図書館蔵）によると、「寛政前より…中略…土人は至而少き処なるに依而トシヘツ川すしに住る者を呼下けて濱住居させしめ」たという。これによると、文化期の海岸コタンの戸数は、和人がトシベツ川筋住民を強制的に海岸へ移住させたことによって増加したかのようである。しかも、この記述の傍証と考えて良い多数のコタン跡がトシヘツ川筋に見られる。資料的には、海岸コタンの戸数増加は、和人がトシベツ川筋の住民を強制的に移住させた結果と見なければならないのであろう。

文化期の住民の生活は、『大概書』によると、「春夏は砂原、鷲の

木、茅部辺へ鯡漁、昆布取雇として蝦夷人さし遣」しということであり、具体的には「鯡漁の節は正、二月頃より五月迄かし遣」し、「昆布取の時節は土用に入り八月十五日迄を限り」としていた。そして秋は、たとえば鮭漁の豊かなユウラツフでは、「秋味の節計番人弐人蝦夷人雇入召連相廻、会所付鮭網を以漁事いたし、同所蝦夷人も右川は漁事いたし候」であった。海岸型のコタン分布を示す地域の多くの場所でそうであるが、本場所でも同様で、『大概書』には冬の生活記録が欠けている。

安政期の彼らの生活がどのようであったのか、四季を追っての具体的なことは不明であるが、和人のアイヌ使役は過重なものになっていたらしく、「孤独の難渋人不少」(『廻浦日記』)であったという。

足利健亮(一〇)(一九六八)によると、文化期の一〇軒を超えるコタンは全て和人の施設所在地であり、この施設所在地のコタンで戸数が多いのは「和人によって強制的に移住させられた結果」であり、この特定のコタンへの集中傾向は「安政年間になると著しく、ほとんど山越内、長万部に集中する程に至る」のだという。安政四年の各コタンの戸数(『入北記』)を見ると、ヤムクシナイでは戸数増加が見られないので別ということになるが、ヲシヤマンベの戸数増加は足利論文が指摘されるようなことであったのかもしれない。なお、戸数増加の著しいユウラツフについても同様のことがいえるかもしれないが、しかし、安政三年のユウラツフは「此処常には土人十四軒ならで無に、落部、茅部辺痘瘡流行の由にて此処へ多く引移り来り居る事也」(『廻浦日記』)なので、あるいはその避難者をそのままにユウラツフの人別帳に加えてしまったという可能性も考えられる。避難の理由は違うが、避難地が村になり、避難者がそこの人別になってしまったという例が、安政四年のウス場所でも見られるからである。

(二) アブタ場所

『渡海記』によると、文化六年の戸口は一六四軒七九二人であり、コタン数は六で、その分布は海岸に五、川筋に一である。各コタンの戸数と人数は第二表の通りであるが、川筋のクロマツナイには戸数しか記されていない。各コタンの戸数合計は一六五軒、人数合計は、クロマツナイを含まないで八一二人となる。戸数で一軒、人数で二〇人も総数を超えてしまう。なお、『大概書』(一一)で文化三(一八〇六)年の様子を見ると、クロマツナイを除いた他の五コタンの戸数と人数を合計すると一六三軒七九四人であり、『渡海記』の総数とほぼ一致することになる。『渡海記』の場合、総数に誤りがあるのか、各コタンの数字に誤りがあるのか、そのどちらであるのかは不明である。

『大概書』と『渡海記』とではコタン名の相違しているコタンがある。『大概書』のフレナイ、『渡海記』のホロナイであるが、戸数と人数とを見ると同一コタンであるらしい。このことについて、佐々木利和(一二)(一九七六)は、「フレナイ川のやや北にポロナイ川があるが、ここにコタンがあったという記録はない」としながらも、「フレナイ

第二表　アブタ場所コタン・コタン跡一覧

資料	大概書		渡海記		蝦夷全図	廻浦日記		丁巳日誌		入北誌		野帳	
コタン(跡)	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数
クロマツナイ	1,2		1		○			△					
シツカリ						△1							
レフンケ	27	119	26	121	○	29	120			24	108	24	107
ヲフケシ	28	113	26	106	○	9	29			10	48	10	45
ベンベ	20	110	21	134	○	22	83			21	97	21	99
ホロナイ			23	114									
フレナイ	23	118			○	(ア)29 (ア)67	92 275			(ア)22 (ア)61	82 258	(ア)22 (ア)61	81 261
アブタ	65	334	68	337	○	△							

備考　(ア)：フレナイコタンアイヌ　(ア)：アブタコタンアイヌ

川を指してポロナイと呼んだことも考えられる」と、ポロナイ＝フレナイの可能性を示している。しかし、『渡海記』での地名記載の順序、そしてその地名に付された記述を見ると、地名フレナイを誤って脱落させていることが明らかである。この両書による相違は、『渡海記』筆写の際にホロナイの記述を脱落させ、そして地名フレナイを脱落させ、地名ホロナイとフレナイの記述を短絡させたことで生じたようである。第二表では『渡海記』の記載するままにしてあるが、ホロナイはフレナイに訂正すべきものであろう。

安政期には、クロマツナイ、シツカリ、アブタがコタン跡として記録されている。しかし、人別帳では、なおアブタコタンが存在するので、五コタンの合計数が場所の戸口ということになるが、その場所の戸口は安政三年が一五七軒六一六人(『廻浦日記』)、同四、五年が一三八軒五九三人(『入北記』、『野帳』)である。

文化期から安政期にかけて、戸口は大きく減少しているが、文政五(一八二二)年は戸口が一七六軒八〇一人(『文政壬午野作戸口表』、北海道庁古文書館蔵)であったので、この減少は、文政五年以後の後松前藩時代に生じたものである。また、安政三年から四年にかけては一九軒二三人も減少している。この減少は一年間のものとしては大きいが、どのような事情によるものかは不明である。

前記のように、安政期にアブタは消滅してしまっているが、その事情は「昔爰(引用者註　アブタ)に会所が有しを、文政五壬午閏正月十九日ウス山焼の後、当時のフレナイに移しけり由。其節迄は土人も此処に在りしが、今是も会所元(引用者註　フレナイ)へ皆

引移りしと」（『廻浦日記』）ということなのであった。また、アブタ村は人別帳では存在していると記したが、それは「其土人共の家今もアブタ夷人と云て」（『廻浦日記』）で、人別帳の上だけでなく、実際にもフレナイで独立的な存在であったらしい。

寛文期のコタンはヘベが一〇軒、レフンケが二軒、オコタラベが一五軒であり、これらのコタンは、何れもウスの「おとなツヤシヤイン持分」であった。戸数は不明であるが、シツカリも「少」しアイヌの「罷有候所」であった（『津軽一統志』、『寛文拾年秋蜂起集書』）[一三]。寛文期最大のコタン、オコタラベが文化期には消滅してしまっているが、前記佐々木論文によると、その消滅の経緯は、「元文から宝暦にかけてのことと思われる」が、オコタラヘからアブタ川の川口付近に「運上屋（交易所）が移され」、そこに「本格的な強制コタンが作られ、やがてオコタラヘが吸収され」たのだという。

『大概書』によると、文化期の住民の生活は「正月より鯡、鱈、鮑を漁事致し」、「春漁済次第六月土用前迄イリコ漁致し」、「土用に入候得は男女共昆布を取」、「八月より九月下旬迄蝦夷人男の分は海中浮候の節イリコを突、且海中時化候節は山々へ登り薪を伐出し」であった。

レフンケ川（『廻浦日記』）、ヲフケシ川（『大概書』）では、多少なりとも鮭鱒の遡上が知られているが、ベンベ、フレナイ、アブタの三川では知られていない。本場所は、冬分の食料確保に難点があったと見られるが、文化期にはこの難点は克服されていて、「九月に入候得は、場所中男夷人の内達者成者年々代り代り調、膃肭臍漁事の

もの、通行人足又は秋味引網手伝の者等場所にて越年致し候様申渡候。其余は…中略…阿武多元場所の分は…中略…シリ別川上へ登り、鮭を冬分より翌春迄の賄に致し、触内より礼分下迄の夷人共は…中略…礼分下番家にて通行人足、秋味引網等残し置、其余は中略…シツ津川上黒松内又はライバの川筋へ相越、銘々賄鮭を取、翌春迄の飯料取」であった。

安政期の住民の生活も、基本的にはこの文化期とほとんど同様であったと思われるが、ただ変わったことといえば、シリベツ川上での鮭漁の後、そこに越冬しなかったことである。安政四、五年のシリベツ川筋踏査記録には、彼らが越冬していた様子がない（『丁巳日誌』）[一四]、『戊午日誌』）[一五]。

なお、シリベツ川上の鮭漁権はアブタアイヌの生得のものではなかった。『東西蝦夷場所境取調書上』によると、アブタアイヌが、ウスアイヌと協同でイソヤアイヌから購入したものであった。その購入時期は、「往古」というだけで不明である。同資料によると、宝暦年間のことであるというが、アブタアイヌはウスアイヌとのもめ事に勝ち、ウス場所の、鮭鱒も遡上するヲサルベツ川筋の全漁業権を入手している。アブタアイヌとウスアイヌとのこの事件から推測すると、シリベツ川上の鮭漁権購入時期は、あるいは宝暦期以前のことでなかったろうか。なお、『丁巳日誌』はシリベツ川上の鮭漁場を記録している。参考のため、それらはコタン分布図に記載してある。

(三) ウス場所

文化三年の戸口が八一軒三三三人(『大概書』[一六])、同六年には八三軒三六六人(『渡海記』)である。安政期には、安政三年が九六軒四七一人(『廻浦日誌』[一七])、同四年が九五軒四八一人(『入北記』)、同五年が九六軒四八二人(『野帳』)である。文政五年が一〇三軒四一七人(『文政壬午野作戸口表』)であるので、後松前藩時代にも、人数だけは着実に増加していた。

文化期のコタンは海岸のウス、ヲサルヘツ、モンベツの三コタンであるが、ヲサルベツの居住者は、本場所住民に漁業権がなかったからであろう、渡し守の二軒二人のみである。また、モンベツの居住者も「牧場木戸番」の一軒三人のみである(『大概書』)。

安政三年は文化期と同様の三コタンである(『廻浦日記』)が、ヲサルベツの居住者は文化期と同様に渡し守で、一軒である。モンベツ居住者は三軒であるが、木戸番であったか、どうかは不明である。安政四年は、ヲサルヘツが消滅していて、新しいコタンがウス湾岸に四コタン(『丁己日誌』[一八])、他の海岸に三コタン(『入北記』)記録されている。

寛文一〇年の本場所は、ウスが三〇軒、ヲサルヘツが「から家」二五軒である(『津軽一統志』)。当時のコタンは戸数三〇軒のウスのみで、ヲサルヘツはコタン跡であったと、そして、ヲサルヘツの二五軒はウスへ移動したのだと理解して良いのであろうか。ここでは、

第三表　ウス場所コタン・コタン跡一覧

資料	大概書		渡海記		蝦夷全図	廻浦日記		丁巳日誌		入北記		野帳	
コタン(跡)	戸数	人数	戸数	人数	コタン	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数
ウス	78	328	83	366	○	95	479			66	343	96	482
キラフノット								○					
ナエフルカ								○					
シヲモイ								○					
ヒイシユンコタン								○					
ヲサルヘツ	2	2				1							
チヤシ						△							
モンベツ	1	3				3				10	36		
イマリマリフ						○				11	54		
ヲヒル子ツフ										5	33		
チマイヘツ						△				3	15		

ヲサルヘツはコタン跡であり、ヲサルヘツの住民はウスへ移動したのだと仮定するが、この仮定にしたがえば、以前のウスは五軒の平凡なコタンであり、ヲサルヘツは東蝦夷地第三位の大コタンであったということになる。

ヲサルヘツ川の文化期の様子は、「庄別滝下迄上り鮭有之、夷人共漁場を取、銘々喰料魚取候」(『大概書』)であり、また、安政期の様子は「鮭、鱒、鯇、鰊、イソカハ、チライ、雑喉等有」であり、川筋のリヤコタンには一軒の鮭漁小屋跡、ソウベツには二軒の鮭漁小屋(『丁巳日誌』)があったという。寛文期のヲサルヘツ川の様子は不明であるが、文化、安政の様子から察するに、川漁は豊かであり、大コタンが立地するに必要な条件を備えていたと考えて良いであろう。

寛文一〇年のウスは三〇軒であったが、当時としては異例というべき大コタンであった。住民は一コタンに集居していたとも考えられるが、後代の様子を見ると、幾つかのコタンに分散居住していたように思われる。

寛政一〇(一七九八)年のウス湾にはメムカ(二六軒九八人)、ウス(一四軒四二人)、ヒイシュンコタン(二二軒一三〇人)の、少なくともこの三コタンが存在していた(『蝦夷日記』木村謙次、以下木村『蝦夷日記』と記す)が、このような状況は、数年後の文化期初め頃にも変わっていなかったであろう。安政期、ウスはウス湾の「惣名」(『廻浦日記』)であったという。単にウスと記されたときには、湾岸の幾つかのコタンを包含しているのが一般であったと考えて良いが、安政四年に新生したかのようなヒイシュンコタンなども、以前から湾岸に存在していたコタンが詳しく記録されたということに過ぎないのである。寛文期のウス住民も、このような後代の様子を見ると、ウス湾岸で幾つかのコタンに散居していたように思われる。

なお、イマリマリフ、ヲヒル子ツフ、チマイヘツの三コタンは、ウス湾岸のコタンとは事情が異なっている。『廻浦日記』によると、ウスの住民は、嘉永六(一八五三)年の有珠山の噴火の際に難を避け、「皆外へ引移り」であった。安政三年には、その彼らも「今は追々元地へ帰り来り候」であったという。しかし、翌四年にも、それらの避難地には、まだ相当の残留者が居た(『宰有日記』安政四年、市立函館図書館蔵)のであった。安政四年の『入北記』にそれらが村として記録されているのを見ると、ウス場所ではそれらの避難地を村並みとし、残留者をもってその新村の人別としたのであったろう。なお、ヲヒル子ツフ、イマリマリフにかつてコタンが存在したとの記録は見当たらないが、チマイヘツ川は隣のモロラン場所との境界で、しばしば紛争が生じていて、かつてはコタンが存在したところである(木村『蝦夷日記』)。

文化期の住民の生活は、『大概書』によると、アブタ場所のアブタ住民と全く同じで、春から秋までは海岸で生活し、秋になると、膃肭臍漁事の者、通行人足、鮭漁手伝の者らだけが会所に残り、他はシリベツ川上で鮭漁、越冬するのであった。

安政期の彼らの生活は、文化期のように、四季を追っての具体的なものを知ることはできないが、文化期とほとんど変わることがな

かったと思われる。たゞし、シリヘツ川上での鮭漁も行われていたが、鮭漁後そのまま越冬することはなかった。

なお、当初からだったのか、どうかは不明であるが、シリヘツ川上の鮭漁場はアブタ場所の分が一三ケ所、ウス場所の分が四ケ所である(『丁巳日誌』)。

(四) モロラン場所

『大概書』[一九]は、文化三年の戸口を二五軒一一六人である。コタンについては一切記していないが、寛政一〇年はモロラン(一三軒、六軒トモ」で四〇人)、ヘケレヲタ(二、三軒)、エトモ(八軒二二人)(木村『蝦夷日記』)である。文化二(一八〇五)年はモロラン(三軒)、ヘケレヲタ(三、四軒)、エトモ(八、九軒)(『東蝦夷地紀行』北海大学図書館蔵)である。

寛政一〇年と文化二年のコタンにほとんど変わりがないので、文化三年も、また三コタンのみであったかと思われる。しかし、文化二年のコタンの戸数を多い数字で合計してみても一六軒であり、文化三年の戸数に九軒不足している。この九軒は、文化二年のコタン平均戸数でいえば二コタン分に相当する。文化期の末から文政期の初めのものと考えられている『蝦夷全図』のコタンを見ると、それには五コタンが記されている。これらのことから推測すれば、文化三年のコタンは若干の記載洩れがあり、あるいは五、六コタン程度だったのであろうか。

安政三年の戸口は四三軒二六九人であり、コタンは海岸に分布する四コタンである。翌四年の戸口は四六軒二六四人であり、コタンは前年と同数の四コタンである。

モロランは、文化期は三軒のコタンであったが、安政期には三〇軒を超える大コタンに変化し、場所住民の七四%もが集中している。この変化の原因は、和人の行政、漁業の中心施設である会所がエトモからモロランへ移転したその時に、あるいは漸次、あちこちのコ

第四表　モロラン場所コタン・コタン跡一覧

資料	大概書		蝦夷全図	廻浦日記		入北記	
コタン(跡)	戸数	人数	コタン	戸数	人数	戸数	人数
モロラン			○	31	199	33	195
ヘケレヲタ				8	40	9	40
ワヌシ			○	△			
チリヘツ				△ 3			
マクニシ			○	△			
ホンモエ				△			
トツカルモエ				△			
ヲシユニク				△			
ホンヲウシナイ				△			
ホロヲウシナイ				△			
シクジ、				△			
シユフキ(エトモ)	25	116	○	2	19	2	18
トカリムイ(トカリシヨ)				2	11	2	18
ヘシホク			○	△			

タンからモロランへ移住する者があったということなのであろう。なお、これらのことと関係がありそうであるが、安政三年には、コタン跡が一〇ヶ所も記録されている（『廻浦日記』）。

文化期の住民の生活は資料に恵まれず、知り難いところがある。寛政一二（一八〇〇）年、「此所ニテ異人王余魚ヲ突テ小石ヲ拾フコトシ」（『東蝦夷地日記』北海道大学図書館蔵）であったという。これは一例でしかないが、文化期の本場所の海漁は、さ程に貧しいというわけではなかったらしい。ホロヘツ、シラヲイ場所からの出稼ぎを受け入れているからである。

本場所には、鮭鱒が遡上し、冬分の食料を確保できるような川がなかったからであろう、彼らは、鮭漁期になるとシラヲイ場所シキウ川へ鮭漁出稼ぎをしていたという（『大概書』）。

安政期には、シラヲイ場所への鮭漁出稼ぎが行われていたか、どうか不明であるが、海漁は、文化期とは違い、貧しいものになっていたようである。和人漁業の盛衰を端的に示す運上金を見ると、前松前藩時代末には八〇両であった（『東夷周覧』北海道大学図書館蔵）が、安政期は三二両余である（『罕有日記』）。ちなみに、近隣の場所を見ると、前松前藩時代末のアブタ場所一二〇両、ウス場所八五両、シラヲイ場所四六両であった（『東夷周覧』）が、安政期はアブタ場所七五両、ウス場所一〇五両、ホロベツ場所三五両、シラヲイ場所一二五両である（『罕有日記』）。当時の和人漁業の不振は、少額の運上金もそうであるが、『協和私役』の「此所漁事甚少なしとて会所通行家とも卑陋殊に甚し。東西夷地に稀なる所なり」という記述によく表れている。

安政期の海漁、和人漁業の不振は、著しいものがあるが、文政五年の戸口が三六軒一四三人（『文政壬午野作戸口表』）であり、アイヌの戸口は文化から、文政、安政へと、着実に増加している。アイヌの戸口の増減は、海漁、和人漁の不振とは関係がないかのようである。

（五）　ホロベツ場所

『大概書』[二〇]には、場所の戸口が記されていないが、各コタンのそれらを合計すると四〇軒一九二人（文化三年）である。コタンは、三コタン全てが海岸にある。

安政三年にはコタンが減少していて、ホロヘツ一コタンであるが、住民は増加していて五二軒二五八人（『廻浦日記』）である。翌四年は五二軒二六六人（『入北記』）で、人数が八人増加している。なお、安政三年には「トカリムイ村、此所も当時此所（引用者註　ホロヘツ）へ引移り来り居る」（『廻浦日記』）であるのに対し、翌四年には「モロラン領マナイ土人家二軒人別十八人アル。外都テホロベツ住居ナリ」（『入北記』）であり、安政三年と四年とでは、トカリムイ村の二軒一八人の扱いが全く逆であるが、この真相は不明である。

寛政三年の様子は、「当所近年衰微して蝦夷人数も無く、小場所ニ付、エトモ一同に請負して諸色エトモ支配なり。産物一切無し。甚タ難渋の様子なり」（『東蝦夷地道中記』）であった。文化期も同様で、

第五表　ホロベツ場所コタン・コタン跡一覧

資料 / コタン(跡)	大概書 戸数	大概書 人数	蝦夷全図 コタン	廻浦日記 戸数	廻浦日記 人数	入北記 戸数	入北記 人数
トカリムイ(トカリショ)						2	18
ワスヘツ	4	16	○	△			
トンケシ				△			
ホロヘツ	30	148	○	52	258	50	248
ヌフルベツ	6	28	○	△ 6			

ホロヘツは「雑魚年中夷人飯料不足」、ヌフルヘツは「雑魚は不足」、ワシヘツは「雑魚夷人等不足」であった(『大概書』)。しかし、良く見ると、何れのコタンも「飯料不足」ということに変わりないにしても、ホロヘツ、ワスヘツでは「年中」であり、ヌフルベツにはそれがない。コタンによって僅かに違っていたらしい。

『大概書』は、このように各コタンの「飯料不足」を記しているが、しかし、「年中」と記されているコタンでも、実際に「年中」のことでなかったようで、冬分の食料は、コタンが位置するそれぞれの川で得られたらしい。彼らには他場所へ鮭漁出稼ぎしていた様子がなく、ホロヘツでは「秋味鮭は前浜并川より取揚候」であった。ワスヘツ、ヌフルヘツの鮭漁は記されていないが、安政元年のワスヘツは「鮭鱒漁あり」であり、また、ヌフルヘツは「鮭漁多し」(『蝦夷日記』)である。文化期にも、それらの川で鮭漁は行われていたのであろう。たとえばホロヘツでの年中「飯料不足故、春に至り江友領え出稼に差出候」(『大概書』)も、鮭漁期に至るまでのことであったろう。

安政期のコタンは、ホロヘツのみであるが、このホロヘツは、文化期の三コタン中最も生活しやすいコタンであったのだろうか。少なくともヌフルヘツよりは生活しやすかったようである。ヌフルヘツ川は、前記のように、安政元年に「鮭漁多し」であるが、その鮭漁の様子は、「九月以後鮭魚ノ遡ルニ至リテハ、若シ上流ノ温泉ニ衆人浴スレハコレカ為メニ下流ノ水変スル所アル由ニテ、鮭魚ノ漁業所獲ナシト称シ、九月以後ハ人ノ浴スルヲ禁スル由」(『観国録』)であった。和人も彼らの鮭漁を側面から援助していたわけであるが、しかし、「此度此処え土人を移して漁業をさせる由支配人申由なるとて、土人共大に恨居たりける。能々此処は住居不宜地と思はる」(『廻浦日記』)で、アイヌはヌフルヘツに移住することを嫌っていた。

白山友正(一九七一)[二一]によると、「寛保元年(一七四一)七月八日頃より大島の噴火あり、その際の大海嘯で家尽く波にさらわれて全滅し、一時人跡を絶つに至ったが、明和五年(一七六八)日高アイヌ数戸、幌別に移住、漸次戸口を増加するに至った」ということである。なお、この海嘯のことなのであろうか、『廻浦日記』は、コタン跡のトンケシについて、「此所も昔時大村なりしが、海嘯の為に皆覆没せしと。其後また二軒残りしが、今は会所元え皆引移る」と記している。

本場所の文政五年の戸口は五八軒二五八人(『文政壬午野作戸口表』)であり、明和から文化、文政、安政へと、アイヌの戸口は着実に増加している。アイヌの戸口増加は、ここでも和人漁業の不振とかかわりがないかのようである。

（六）　シラヲイ場所

『渡海記』によると、文化六年の戸口は八二軒三四九人、コタンは六コタンで、それらは全て海岸にある。

ヲモンヘツは「夷家あり」とあるのみで、住民数が記されていない。このヲモンヘツは、『大概書』[二二]ではコタンとして記されていないが、安政期にはコタン跡として記録されているので、本稿では、文化期のコタンとして扱うことにしてある。

安政期の戸口は、安政三年が八五軒四一二人（『廻浦日記』）、翌四年が八六軒四一三人（『入北記』）である。コタンは両年とも四コタンで、全て海岸にある。なお、文政五年の戸口総数が七二軒三三二人（『文政壬午野作戸口表』）であるので、戸口は前幕府時代に若干減少し、後松前藩時代を経て増加したということになる。

安政期にコタン跡として記録されているのは、ヲモンヘツ、メツフの二ケ所（『廻浦日記』）であるが、何れも文化期のコタンである。なお、安政三、四年のヲモンヘツは、他の資料では「七、八戸ノ住夷ヲ見ル」（『観国録』）、あるいは「夷家三軒」（『罕有日記』）であり、コタンであったかのようである。しかし、安政三年のそれは「出稼土人」（『廻浦日記』）であるという。本稿では、「出稼土人」の家所在地はコタンとして扱っていない。したがって、安政三年のヲモンヘツはコタン跡としてある。また、翌四年も同じく「出稼土人」であったのだろう。『入北記』には、コタンとしてのヲモンヘツが記されていない。

文化期の各コタンの生活は、ほとんど同様で、たとえばシキウでの生活は、正月より四月迄は「前浜一里計沖にて鱒、鮑の類」を取り、四月になると「沖合にて大鮫の類」を取り、また、四月中旬になると「江友え夷人共拾四、五人も番人附添差遣し、煎海鼠引」、五、六月は「夫々夷手分けアイロ、エタキえ昆布取」に行く。そして「残り女の子の分は、同所より弐町計山え四月中に粟・稗・大角豆等薪置八月中に取」である。また、九月上旬になると、シキウ川で「鮭漁事仕」るのである（『大概書』）。このシキウ川の鮭漁には余裕があったらしい。前記のように、モロラン場所アイヌの鮭漁を許しているからである。

なお、文化期のアイロは鮭漁が記されていない唯一のコタンであるが、寛政三年のアイロの産物に鮭が記されている（『東蝦夷地道中記』）し、安政元年も「鮭漁あり」（『蝦夷日記』）なので、文化期にも鮭漁があったのは確かであろう。

前浜での海漁は、各コタンでそれぞれに行われていたらしいが、

第六表　シラヲイ場所コタン・コタン跡一覧

資料 / コタン(跡)	大概書		渡海記		蝦夷全図	廻浦日記		入北記	
	戸数	人数	戸数	人数	コタン	戸数	人数	戸数	人数
フシコベツ					○				
アイロツ	5	16	5	16	○	3	11	3	10
ヲモンヘツ			○			△5			
メツフ	5	31	5	31		△5			
シキウ	33	141	33	141	○	38	175	38	171
シラヲイ	30	113	30	113	○	37	203	39	209
シヤタイ	9	48	9	48	○	7	23	7	23

一般に不振であった。たとえばメツフでは「近年不漁に付、当分夷人飯料分も無之候」であったし、シラヲイでは「近年不漁に付賄取のみに候」であったという。

本場所からエトモ（モロラン）場所への出稼ぎがみられる。この出稼ぎは、本場所の全コタンが行っていたと思われるが、あるいは一部のコタンだけであったのかもしれない。メツフ、シヤタイのコタンについては出稼ぎの記録がない（『大概書』）からである。

安政期の主産物として、文化期のものに鰯が加わっている。モロラン場所で記した運上金が、安政期に三倍近い増額を示しているのは、鰯業がよほどに盛業だったのであろう。安政元年の鰯漁は「五月より八月時分迄」であったという（『蝦夷日記』）。前記のモロラン場所での海漁の不振と、この鰯漁の盛業と関係しているのであろうか、安政期の資料には、モロラン場所への出稼ぎが記されていない。

（七）ユウフツ場所

『大概書』[一三]の戸口は二九軒一二三八人である。『大概書』には年度が示されていないが、内容から文化四年（一八〇七）以降のものであることが明らかであり、『渡海記』の総数と一致することから、文化六年のものであったと考えて良いであろう。文政五年の戸口は三一二軒と一三一二人（『文政壬午野作戸口表』）、安政期は、安政三年が二二九軒一〇六三人（『廻浦日記』）、同四年が二二九軒一一四六人（『入北記』）、同五年が二三二軒一一五九人（『野帳』）である。

『大概書』によって、三二コタンを採取したが、その分布は海岸に一コタン、川筋に三一コタンである。川筋のコタンはユウフツ川筋に一コタン、チトセ川筋に七コタン、アツマ川筋に六コタン、ムカワ川筋に一六コタンである。これらのコタンは、実は、たとえば「あつま川は西蝦夷地ゆうはり山に続き、川丈拾六、七里の内夷人住居也」として、そこに記されている地名をコタン扱いとしたものである。

これらの全てがコタンであるとの確証はないが、『蝦夷全図』に記されたコタン数は三四であるので、必ずしも誤って余計なものを採取しているのではなさそうである。

安政四、五年の川筋の一コタンあたりの平均戸数は、複数のコタンを持つ川筋について見ると、チトセ川筋が一〇コタンで六軒、アツマ川筋が五コタンで五軒、ムカワ川筋が二五コタンで五軒である（『丁巳日誌』[一四]、『戊午日誌』[一五]）。

寛文期のコタンの「おとな」は、タルマイとコエトイが「七」、シコツが「平左衛門、小ニシウヘカワ、此外おとな有」、アツマが「シコツアイヌの持分」、ムカワが「ニシ介持分」であった。なお、「ニシ介」は東隣のサルの「おとな」である（『寛文拾年狄蜂起集書』）。文化期の本場所は、かつて「七」の支配下にあったタルマエ、コエトイの海岸部、チトセアイヌ「おとな」の支配下にあったチトセ、アツマの川筋、そしてサル川「おとなニシ介」の支配下にあったムカワ川筋から成り立っていたのである。

文化期に入った頃までの彼らの生活はどの川筋でもほぼ同じで、

第七表　ユウフツ場所コタン・コタン跡一覧

資料	大概書		蝦夷全図	廻浦日記		丁己日誌		入北記		戌午日誌		野帳（5年）	
コタン（跡）	戸数	人数	コタン	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数
タルマイ	○		○	1	2			1	2			1	1
一黒川上				△5									
マコマイ				△5,6									
ユウフツ			○										
トアサヘツ										△			
ホタンナイ	○												
ヲハニケフ				2	11			2	11	3	16	2	10
ヘンケヒヽ				1	6			1	6			1	6
イサリフト			○	7	27	8	31	7	26			7	27
イサリ	○					5	12	6	20	6	22	6	21
ムイサリ	○		○	6	22								
ホラツケ			○										
ソウヘツ							△						
カマカフト							△						
ヲサツ				9	40	9	25	9	39			9	40
マヲイ			○			△							
ホロナイ						△							
ツカペツ						△							
シユクパイ						△							
チイカイ	○		○										
子シコシ						△							
ホンベツ				△		△							
マヽツ			○	△									
ロウサン	○												
ﾁｶｾ（フレトエイ）				24	97	15	63	24	95			24	96
トヘトマイ						△							
ヌンナイ			○			2	9					2	10
ランコウシ	○			6	29	3	18	6	29			6	29
ペサ						4	18					2 2	12 6
カマパ						△							
ナイフツ						△							
マヌ	○		○	3	14	△		3	14			1	2
ヌツタ						△							
コウコソブト						△							
ルウエン						2	8					1	5
マツクシリ						△							
ヲセツコチ	○					3	10					2	9
シユ子チヤ						△							
シトクン子ペ						△							
ウツカカ						△							
シヨツキ						△							
ヲサクマナイ				15	66	5	16	15	64			8	31
モヘツブト			○	△		△							
アツマフト				2	6			2	6	2	6	2	6
シユブン	○		○	10	48			10	48	△		10	50
ウシヽヘツ				△									
キムンコタン										10	50		
ﾊﾔｼﾍﾟ（ﾄﾏﾀｺﾀﾝ）			○							△			

資料	大概書		蝦夷全図	延浦日記		丁巳日誌		入北記		戍午日誌		野帳(5年)	
コタン(跡)	戸数	人数	コタン	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数
ヘハヱツフ	○												
チケツヘ	○		○	3	26			3	27	5	26	5	27
ウクル			○	△ 4						△			
トンニカ	○			7	45			7	45	4	24	7	42
ニタツナイ										3	18		
ピラウトル			○										
ホロコツチ										△			
ヲフムセナイ										△ 1			
シケレペウシペ	○		○	△									
シヤウヤウシコツ										△ 2			
ホロナイ			○										
シユルク				△ 2						△ 2			
チリチリ	○			△									
ムカワフト	○		○	4	22			4	21	4	22	4	22
ライバチン			○										
チン				10	59			10	58	10	59	10	59
イモペツ	○		○	6	28			6	29	6	29	6	29
シリキヲトンカ										△			
ケナシヨロ				4	20			4	20	4	21	4	21
チシ子ー	○		○										
カアナイ				4	26			4	27	4	28	4	28
モイペツ	○		○	7	37			7	36	7	38		
ヲサン子フ			○	1	2			1	2	1	2	1	2
ソコムカ										△ 2			
キリカツチ	○		○	4	22			4	19	4	21	4	21
ユクペツ	○		○	8	40			8	39	8	40	8	40
(パンケ)キナウシ	○		○	4	25			4	24	5	24	5	24
ニワン	○		○	6	41			6	42	6	42	6	42
カイカウリ	○			7	36			7	36	7	36	7	36
トコタルマイ										△			
イナエフ	○		○	6	35			6	35	△			
ハンケイチミフナイ			○							6	35	6	35
ヲチヤルセナイ										(3)			
ホロノタフ										2	9		
(ペンケ)キナウシ				8	44			8	41	6	31	8	40
ルベシベ	○		○	5	24			9	56	5	22	5	22
(シユムンテキ)レベシベ				4	33					4	35	4	35
カイクマ				6	30			6	30	6	30	6	30
トロソー	○		○										30
シユブンナイ				9	56			9	55	6	37	9	56
ボヘツブト	○			13	54			13	55	12	52	13	57
ハンケトヨマナイ										3	18		
ヘンケトヨマナイ										1	5		
ユクヲロナイ													
ホペツ				7	35			7	35	7	34	7	34
エフけ井(オフイナイ)	○												
パタル(ヘトンナイ)	○		○	5	28			5	29	5	28	5	28
ニナツミフ				5	26			5	26	5	26	5	26
ヘンケニナツミフ										△			
セタンニウシ	○		○							△			

川漁、山猟によって生活していたらしい。寛政三年のアツマ、ムカワ川筋での産物は干鮭、椎茸、シナ縄（『東蝦夷地道中記』）で、川筋の住民が海漁をしていた様子が見えないし、チトセ川筋のアイヌの生活は「海漁無数故川漁をして夫食とす。初秋よりは千年川にて鮭漁有。是を重の食にし産物に出す」（『大概書』）であった。また、最も海漁に関係ありそうに思われるタルマエも、文化四（一八〇七）年には「同所川上に夷家五、六軒有之由。鮭漁するよし」（『西蝦夷地日記』）であり、川筋に居住していて海漁をしていたらしい様子はない。

本場所はアイヌにも、和人にも海漁のないところであったので、『大概書』によると、川筋のコタン住民が海岸のユウフツに姿を見せるのは三月末から夏までの間で、「冬稼の産物干鮭」を背負い運び出すためであった。しかし、その頃、このような状況も変わりつつあった。文化期に入って間もなく始められた「春夏の内海漁試稼」に従事するようになり、彼らがコタンに帰れるのは、この海漁の後になってしまったからである。なお、海漁は好成績をあげ、安政期には、本場所の産物は「鰯八分、鮭二分」（『東蝦夷日誌』）となり、鰯漁では「東部第一の漁場」（『東蝦夷日誌』）にまでなっている。

海漁が行われるまでの彼らは、たとえばチトセ川筋のアイヌは、「春の内椎茸を取、其外稼なし」であるが、前記のように、三月末から夏までの間に干鮭をユウフツに運び出し、それを船積みの手伝いをし、チトセに帰るのであった。そして「秋より冬は千年川にて鮭漁」のみで過ごすのである。女は「作物をも少々仕付、又はうはゆり、ふくしやの類を取食物の糧に致し、厚子を織男女着用にする也」であった（『大概書』）。他の川筋に居住する者の生活も、多分、これに準ずるものであったろう。

本場所で海漁が行われるようになってからの彼らの生活は、春から夏までそれに従事することになったわけであるが、安政期にはその労働が全てであったかのように、ユウフツには「土人雇小や」が立ち並ぶ有り様であった（『東蝦夷日誌』）。しかも、彼らの労働は本場所内の海岸に限らず、アツタ、ヲタルナイからアツケシ辺にも及んでいた（『東蝦夷地場所請ヨリ申上』）。『罕有日記』によると、「ユウフツ領は好漁地なり。夷人多しといへども石狩川頭えも出稼し、且つアツケシえ貸し遣すなれば、人力は不足にて」という状況さえ生じていた。『戊午日誌』によると、そのアツケシでの労働は、「ユウフツ、サルの両場所土人を此処（引用者注　アツケシ場所シリシユッ浜中）え呼出し、百人ツツ交替して召使ふなり」であったという。

このような状況下のコタン住民について、『丁巳日誌』は、たとえばチトセ川筋ランコウシで、「ヌカラコウコ　家内十二人…中略…其内九人は子供なるが、何れも達者にて育ちけるに、是も十二歳位より下五人家に残り、後四人と弟とは浜え雇に取られ居るよし」と、「シイタツコ　家内四人…中略…是も夫婦ともに雇に取られ居るよしにて、家には誰も不居由」と述べている。また、『戊午日誌』でも、アツマ、ムカワの川筋も同様であり、労働可能な者のほとんどが「雇に取られ」ていたと述べている。

本場所で「雇に取られ」、コタンを離れていた者は、遠藤匡俊(二六)(一九八五)によると、安政五年の総人数の四二%にもなっていたという。同論文には各川筋毎の数字が示されていないので、参考のためにそれを見ると、アツマ川筋は二四軒中一六軒で誰かが雇に取られていて、一二四人中四〇人がコタンを離れていた(『戊午日誌』)。コタンを離れていた者の比率は三二%である。以下、数字のみを記すと、ムカワ川筋は一三四軒中一一四軒、七二四人中三一二人、四二%である(『戊午日誌』)。ちなみに、アツマ、ムカワの両川筋を合わせて見ると、コタンを離れていた者の比率は四二%になる。チトセ川筋もアツマ、ムカワの両川筋とほぼ同様の状況であったと考えられる。

安政期、チトセ川筋では一七ケ、アツマ川筋では七ケ、ムカワ川筋では六ケのコタン跡が見られるが、これらは、住民の減少によるものであったのだろうか。少くとも住民が海岸へ移動したことによるものではなかった。川筋から海岸への移動が見られるのは、僅かにタルマエだけだったからである。

(八) サル場所

『大概書』(二七)によると、文化期の戸口は二三六軒一〇一三人である。なお、『大概書』に調査年がないが、文化六年の『東行漫筆』(北海道大学図書館蔵)記載の戸口と一致するので、以下、文化六年のものとして扱う。

文政五年の戸口は二三二軒一二一五人であるので、前幕府時代にくらべると戸数で減少し、人口数で増加している。後松前藩時代を経過した安政三年の戸口は二二六軒一一三三人(『廻浦日記』(二八))であり、戸数、人口数ともに、文政期以下に減少してしまっている。しかし、同四年の戸口は二五〇軒一一六五人(『入北記』)で、増加を示し、同五年の戸口は二七七軒一二一九人(『戊午日誌』(二九))となり、文政期以上に増加してしまっている。

本場所のコタンは全て川筋に分布している。その内訳は第八表の通りである。第八表でのアツベツ川筋には本場所のコタンしか記していないが、アツベツ川筋はニイカップ場所との境界であり、ニイカップ場所アイヌも居住し、彼らのコタンが存在していた。アツベツ川筋のコタンはニイカップ場所分のコタンを加えると、文化期には五コタン(『大概書』)、安政期には一一コタン(『戊午日誌』)である。なお、安政期のコタンには、サル、ニイカップ両場所のアイヌが混住するコタンもあった。それはホロハクツ、アカンである。

複数のコタンが分布する川筋の一コタンあたりの平均戸数を見ると、文化六年のサル川筋は一一軒、モンベツ川筋は九軒、アツベツ川筋は、サル場所分のみであれば八軒、ニイカップ場所分のものも加えると六軒となる。安政五年のサル川筋は一二軒、モンベツ川筋は九軒、アツヘツ川筋は、サル場所分のみであれば二軒、ニイカップ場所分のものも加えると四軒となる。

サル川筋には大コタンが分布することで知られているが、文化六年には一〇軒以上が九コタンあり、その中には二〇軒以上が二コタ

第八表　サル場所コタン・コタン跡一覧

資料	大概書		蝦夷全図	廻浦日記		入北記		戊午日誌		野帳	
コタン(跡)	戸数	人数	コタン	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数
サルフト	15		○	13	64	14	67	3	9		
トンニカ				△				10	42		
ヲコタノサル				△				△			
ヒタラパ								3	18		
ヒラカ	25			25	145	25	144	24	120	24	120
シユムンコツ	6			17	90	20	90	23	96	23	95
チエツホツナイ(ヌヘルナイ)	10		○	△10							
サラパ								19	81	19	81
(ヘンケ)ニナ	25		○	16	66	17	76	△			
ヘンケヒラウトルナイ	17		○					△			
ビラトリ(ヲハウシナイ)				28	151	33	158	31	160	31	160
ニブタニ	11			25	110	25	107	8	38		
ビバウシ	10			△10				15	68		
カンカン	2		○	△ 2				3	14		
ホロニナツミフ								△			
ベナコリ	13		○	△13				12	48		
シケレヘ								6	30		
ニヨイ	5		○	24	103	32	118	14	58		
ヌツケベツ	8			8	48	7	44	10	45	10	45
モビラ	8			△ 1							
ヲサツナイ	11			7	33	8	36	7	30	7	30
ホロケソマツフ	7			△ 7							
ホロサル	5		○	17	85	19	91	23	91	23	91
イケウレリ	6		○	△ 6							
ヲイサルンベ								△			
ホンユクチセナイ								2	8		
クヲナイ								1	4		
モベツ(ヲサツナイ)	11		○	8	46	8	46	12	56		
マラフトシヤハンナイ								△			
ニナツミツ(クツタラ)	6			6	43	5	28	6	26	6	26
カムイシツタル				△2,3							
カバリ	18			21	101	24	104			21	98
クマチトエ				△ 4							
ユウシヤ				△1,2							
アツヘツフト		2				13	56	1	5		
ケナシタシナイ								2	8	2	8
ホロハクツ								2	10	2	10
ホンユクナイ	12			☆11	48			6	26	6	26
フレナイ											
ヲサツナイ											
アカン								1	1	1	1
ヲン子ウクルカフ											
モトカンヒベツ											
ハンケヲキアシ								2	12	2	12
ムイ子ヒ								△			
ヒウ	4										
リヒラ				☆							
ナヌニ								3	14	3	14

備考　☆：ホンユクナイとリヒラの合計数

ンも含まれているし、安政五年にも一〇軒以上が一〇コタンあり、その中に二〇軒以上が四コタンも含まれている。川筋にこのような大コタンが並ぶのはサル川筋のみであり、特異な例となっている。

寛文期のサルは家数が「二〇軒ばかり」で、三名の「おとな」がいた(『津軽一統志』)。このことは、サル川筋に三コタン、あるいはそれ以上のコタンの存在を思わせる。もし、そうであったとするなら、当時のサル川筋は、多数のアイヌを居住させ得る程に川漁、山猟が豊かであったと考えて良いのであろう。

しかし、寛政期の初めには、産物に鮭が見当たらない(『東蝦夷地道中記』)。享和二(一八〇二)年は「以前ハ寒中ヨリ春マデ鹿猟ヲナセシガ近来此猟ナシ」(『東蝦夷周覧』)、文化六年は「七月頃より鮭魚昇るといへ共至て少し」(『大概書』)であり、当時は、自然が貧しいものになっていたこともあろうが、サル川筋の住民はサル川筋の川漁だけでは十分な冬の食料を得られなくなっていて、冬分の食料は「千年川鮭漁出稼致し食糧を貯へ」(『大概書』)なければならない程になっていた。当時の和人は、このような状況の本場所に対して「一体夷人大勢にて産物乏しき場所故、夷人経営不宣方也」(『大概書』)との評を与えている。

『大概書』によって、彼らの四季の生活を見ると、春は「海辺へ出て釣物をなし」、夏は「生海鼠を引、昆布を刈」り、前記引用のように、秋には「千年川鮭漁出稼致し」であった。そして冬は「山家へ帰り、漁船、又は網を拵へ、榀縄をなひ、女は厚しを織、キナ筵を編み」であった。

なお、「男女共春より秋迄漁業手透の節は粟稗を作り、或は茎立の草、同根を刈取、魚へ交て食糧の資とす」であったが、寛政一〇年の農業の担い手は、たしかに「男女共」にであっても、「夷人の中にても不具なるもの歟老男女歟漁事不達者の者計致すなり」(木村『蝦夷日記』)であった。前松前藩時代末期の農業は、海辺の漁業労働に耐えられない、あるいは不向きでコタンに残る者の仕事になっていたのである。文化期の農業の担い手も、実際には、これと変わることがなかったのであろうと考えている。

文化六年、本場所の番屋は本場所内のフクモミ、シノタイ、ミツイシ場所のヘツトウカリ、ウラカワ場所のヲニウシ、シリイトに置かれていた(『東行漫筆』)が、前記引用の春から夏までの彼らの生活は、これら番屋所在地でのものと考えて良いのであろう。『大概書』によると、本場所の番屋での労働は、「夷人に番人壱人宛差添、二月中旬より罷越、八月中旬引払」であった。ミツイシ場所の番屋での労働は、ウラカワ場所の番屋でも同様であったろうが、「夏土用頃より夷人に番人差添罷越、八月初め引払」であった。前述のコタンに残り、農業に従事する者は、この番屋での労働に耐えられない、あるいは不向きの者達だったのであろう。

安政期の彼らの生活も文化期とほぼ同様であったが、彼らが春から秋にかけて労働する所は更に遠くなり、西蝦夷地のアツタ、ヲタルナイ(『東蝦夷地場所請ヨリ申上』)へ、また、アツケシ場所シリシユツ浜中へも及んでいた(『戊午日誌』)。

安政五年、和人の労働に従事し、コタンを離れている者は、遠藤

論文によると、場所全体では三四％であったという。『戊午日誌』によって、川筋毎のそれを見ると、前場所にならい数字だけを記すが、サル川筋では二一一軒中一七八軒、九四八人中三二五人、三四％である。モンベツ川筋では二一軒中一七軒、九四人中二七人、二九％である。アツベツ川筋では一七軒中一〇軒、七六人中一五人、二〇％である。

サル川筋のコタンは、文化期から安政期にかけての間に、若干の移動と消滅が見られる。安政三年にコタン跡として記録されているものは九ヶ所（『廻浦日記』）であるが、文化期のコタンが消滅してコタン跡になったものは七ヶ所である。その七ヶ所は、同五年の調査では四ヶ所に減少する。他の三ヶ所は、依然としてコタンであったからである（『戊午日誌』）。移動したコタンはヒラトリ、ニナの二コタンである（『戊午日誌』）。ヒラトリはヲハウシナイへ、ニナはサラバへ移動している。これらのコタン移動時期は、何れも「昔」ということである（『戊午日誌』）ので、第八表の『廻浦日記』、『入北記』が記すコタンは既に移動してしまっていたものである。なお、コタン名は移動後も変っていなかった。また、一〇〇年前ということであるが、ホロニナツミフのニナツミフ村はモンヘツ川筋のクッタラへ移動している（『戊午日誌』）。

（九）　ニイカツフ場所

文化五（一八〇八）年の戸口は七一軒三三九人（『大概書』(三〇)）である。以後の戸口は文政五年八一軒三五八人（『文政壬午野作戸口表』）、安政三年九二軒三八八人（『野帳』）、同四年一一〇軒四一〇人（『入北記』）、同五年一〇六軒四〇二人（『戊午日誌』(三一)）である。

文化期、安政期ともにコタンは全て川筋にあり、その内訳は第九表の通りである。

川筋の一コタンあたりの平均戸数を見ると、アツヘツ川筋はニイカツフ場所分のみであるが、文化五年に五軒、安政五年に四軒となっている。ニイカツフ川筋は文化五年に八軒、安政五年に六軒となっている。両川筋ともに、安政五年の平均戸数が小さくなっているが、文化五年にはアツベツ川筋が三コタン、ニイカツフ川筋が七コタンであるのに対し、安政五年にはアツベツ川筋が六コタン、ニイカツフ川筋が一四コタンと、コタン数が何れも二倍となっている。両川筋とも、安政五年の戸数は増しているが、その増加率はアツベツ川筋で三七％、ニイカツフ川筋で四七％である。平均戸数が減少したのは、コタン数の増加率が戸数のそれを上回っているからであろう。

『大概書』によると、和人は、本場所をサル場所と同じく、「一体産物乏しき夷人経営不宜場所也」と評している。同書は、当時、住民は「砂馬荷（引用者註　シャマニ）場所へ昆布出稼」し、「勇武津奥ムイチヤリ川へ鮭漁出稼」していることを記している。当時の本場所は、海漁も、川漁も不振であったらしい。

なお、同書によって鮭漁を見ると、ニイカツフ川について「八月頃より鮭魚昇り夷人食料となす。残り千立荷物に出す」と、アツヘツ川については、「昇鮭あれとも至て少し」と記している。冬分の食

第九表　ニイカツフ場所コタン・コタン跡一覧

資料	大概書		蝦夷全図	延補日記		入北記		戌午日誌		野帳	
コタン	戸数	人数	コタン	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数
アツヘツフト						22	84				
ケナシクシナイ											
ホロハクツ								2	13	5	22
ホンユクナイ											
フレナイ								5	19	6	20
ヲサツナイ	4										
アカン								1	3	1	3
ヲン子ウクルカフ	6							3	17	3	17
モトカンヒベツ								7	24	7	24
ハンケヲキアシ				☆21	90						
ムイ子ヒ								△			
ヒウ				☆				4	14	4	14
リヒラ	6										
ナヌニ											
ホロセツフ				△							
ニイカツフヘツ				3							
タカイサラ	15		○	18	62	19	69	17	58	17	58
ミケルイ								○			
トキセベツ			○								
ホロハクツ								3	9		
ソリハライ	10		○	13	51	25	74	20	63	20	63
ア子イサラ	4		○	16	72	18	83	15	69	18	83
サトツチヤ	6			△ 6				3	14		
ウルキ								△			
マウニシヨロ				6	29	5	14	3	10	5	14
バンケウンマエフ								2	4		
アクマウ	8							1	6	1	6
ヲチウシ								3	12	3	12
フルケシ			○	9	37	8	32	△			
カツクミ	4		○	△ 4				9	33	9	33
ヲシヤマウニ				9		13		1	4	1	4
クツタルシ								1	9	1	9
シユ子ナイ	8			△ 8				1	3	1	3
ヤムワツカ								5	18	5	18

備考　☆：ハンケヲキアシとリヒラの合計数

料確保は、ニイカツフ川筋の住民は問題がないが、アツベツ川筋の住民には若干の不安があったかのようである。しかし、アツベツ川筋の住民も、本来的にはそれの確保は可能であったのであろう。かりに、当時は確保が不可能であり、そのためにムイチヤリ鮭漁出稼ぎをしていたとしても、そうなったのはごく最近のことであったようである。ムイチヤリへの鮭漁出稼ぎは、文化元年からのことだったからである(『大概書』)。

『大概書』が記す住民の生活は、春は「海浜え出て釣ものをなし」である。夏はアツベツで、「生海鼠を引」き、シツナイ場所フツシで「昆布を刈」るのであった。秋は前記の鮭漁を行い、冬は「山家へ帰り、漁船、船網を拵、椢縄をなひ、女は厚し、キナ筵を編み」というものであった。なお、「春より秋迄漁業手透の節は粟、稗を作り」

である。

住民の安政二年の生活は、月を追って記すと、「五月入梅比ヨリ八月中迄鰯漁」、「六月土用中昆布取」、「五月下旬ヨリ六月中煎海鼠猟漁」、「九月中ヨリ年ニ寄十月迄鮭漁」、「十一月ヨリ十二月中御軽物小隼類猟業」、「正月ヨリ二月中鹿猟」(『東蝦夷地場所請ヨリ申上』)であった。安政期の生活は、基本的には文化期の生活と少しも変わるところがなかったのである。

住民の海岸の生活は、文化期、安政期ともに和人漁業の労働に従事することであったが、安政五年、そのためにコタン離れている者は、遠藤論文によると二八%である。川筋別に見る(前場所にならい数字のみを記す)と、アッベツ川筋(ニイカップ場所分のみ)は二二軒中一五軒、九〇人中一四人、一六%である。ニイカップ川筋では八四軒中五三軒、三一二人中七九人、二五%である。なお、アッベツ川筋では、サル場所の場合にはコタンを離れている者の比率が二〇%であったので、本場所の方が少しばかり低率である。

(一〇) シツナイ場所

『大概書』[三二]が記す文化期の戸口は一二三軒五五四人であるが、調査年度が記されていない。同書の戸口は、文化六年の『東行漫筆』が記す戸口一二二軒五二九人と一致しないが、『廻浦日記』が文化六年改めとして記している数字とは一致する。ここでは、かりに『大概書』を文化六年のものとして扱うこととする。

安政期の戸口は、安政二年一二七軒六四二人(『東蝦夷日誌』)、同三年一二七軒六五八人(『廻浦日記』)、同四年一二八軒六七五人(『入北記』)である。なお、『戊午日誌』[三三]の基礎資料として使用されている『野帳』の戸口は一四九軒八三三人である。この基礎資料の戸口が四年のものか、五年のものかを判定することは難しいが、何れの年のものとしても、『廻浦日記』、『入北記』に記されている戸口との違いが大き過ぎるようである。

コタンの分布を見ると、文化期は海岸に五コタン、川筋に一六コタン(『大概書』)あり、安政期は海岸に五コタン(『廻浦日記』、『野帳』)、川筋に二九コタン(『野帳』、『戊午日誌』)ある。本場所のコタンの分布は内陸型といって良いのであるが、文化期には、意外に海岸のコタンが多く、その比率は二四%にもなっている。安政期には海岸コタンが減少していて、一五%である。なお、安政三、四年と同五年とのコタン数には相当に大きい違いがあるが、この違いは安政三、四年が村で、同五年はコタンで記載されていることによるものである。

複数のコタンが分布する川筋について、一コタンあたりの平均戸数を見ると、シビチャリ川筋が文化期に五軒、安政期に六軒であり、モンベツ川筋では文化期が八軒、安政期に三軒である。ブッシ川筋は安政期のみで、五軒である。

文化期の住民の生活は、『大概書』によると、春は『海浜え出て釣ものをなし』、夏は番屋の所在地、ヲアトシュマ、チノミで「昆布を刈」るのである。秋には「シヒチャリ川にて鮭を漁し食料に貯へ、

第十表　シツナイ場所コタン・コタン跡一覧

資料	大概書		蝦夷全図	廻浦日記		入北記		戊午日誌		野帳	
コタン(跡)	戸数	人数	コタン	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数
シビチヤリフト	2			39	175	40	185	6	33	6	33
メナ			○								
シンブツ	5		○	○							
サツ								5	30	5	30
ペバウ	7		○	○				1	2	1	2
ピラハウシナイ			○								
メナブト	2		○	△ 2				8	49	8	49
ヘツウトル	6		○	△ 6							
トウブツ	5		○	4	24	4	24	13	78	13	78
イヲフル(フルルイカ)	3		○	3	12	3	11	12	67	12	67
ヌブカ			○	5	22	5	23	3	24	1	6
ヌフカウシコツ			○								
タブコサン	7			△ 7							
ルベシベ	6		○	2	13	3	16	11	58	10	50
メナヲロ								2	7	4	25
マクンベツブト	5		○	16	78	16	79	9	44	9	44
ノヤシヤリ	9		○	3	19	3	20	2	17	2	17
イチブエイ	7		○	5	22	5	20	4	22	4	22
ベンケヘラリ			○					2	12	2	12
チヌエヒラ								4	22	4	24
ヲフシユンケイ(ノフシケナイ)	2		○	△ 2				△			
マウタシヤフ	2			△ 2							
ウセナイ			○								
ウラ	4			8	45	8	45			9	45
モンベツフト	1			9	60	9	61	1	7	1	7
アンサミ								2	12	2	12
セホツナイ								2	13	2	13
シトカフ	4							1	7	1	7
チカフンナイ								1	8	1	8
トウフウシナイ								4	25	4	25
ホロナイ								8	44	9	48
ユウルシ								1	10	1	10
ブユニ								2	12	2	12
サヌシベ								4	14	4	14
ヘテウコヒ								1	4	1	4
ヌプトロヲマナイ	6										
チノミ	8			△ 8							
シヨシヨシナイ				3	14	3	15			2	11
ヲコツナイ				△2,3							
シツナイ	7			12	81	12	86			8	40
チヤラセナイ				4	21	4	20				
ラシユツヘ	11			12	64	13	70				
ホンラシユツヘ				△							
ブツシ	3			△ 3						1	7
ホトウエン										3	21
フレウシ										13	74
ヘテウコヒ										4	15

余は干立荷物に出し」、冬は「山家え帰り漁船、網を拵へ、椢縄をなひ、女は厚し、キナ筵を編み」であった。なお、「春より秋迄漁業手透の節は粟、稗を作り、或は茎立の草、同根を刈」るのである。

『東蝦夷地道中記』によると、本場所の出産物は「鯡を第一の荷物」とするが、「其外かすべ、煎海鼠、昆布」である。海漁が豊かで、和人漁業にとって利の多い場所であったらしく、前松前藩時代末の運上金は、ユウフツ場所の三六〇両には及ばないものの、近隣の場所を圧して二八〇両という高額であった。この和人漁業の好況と深いかかわりがあるのであろうか、本場所の住民の生活は「一体産物乏しからざる場所故、夷人経営も宣方也」との評を得ている。

安政期の住民の生活は、基本的には文化期と変わるものではなかったが、春は「鱈漁…中略…近年ニ至リ一切漁事無御座候。依テ春中ハ薪材伐出シ、又ハ道、橋普請等仕」であり、海岸での春の労働は、釣ものから土木工事に代わってしまっていた。夏は、これまで通りに「海鼠引」、「昆布ハ例年夏土用入ヨリ刈取仕八月中旬」迄であったが、これらに新しく「入梅前後ヨリ」「七月筋迄」の鰯漁が加わっている。これからが彼ら本来の生活に戻るのであるが、「小雪ノ比ヨリ」「冬至之比迄」川筋で鮭漁を行い、「明春正月下旬比迄」まで鹿猟を行うのであった(『東蝦夷地場所請ヨリ申上』)。

安政五年、コタンを離れ、海岸での労働に従事する者は、遠藤論文によると、シビチャリ、モンベツの両川筋では、住民の五二%に達しているという。これを川筋別に見る(前場所にならない数字のみ記す)と、シビチャリ川筋が八二軒中七九軒、四六五人中二〇〇人、四三%である。モンベツ川筋では二七軒中二四軒、一五六人中一二五人、八〇%であった。

(一一) ミツイシ場所

戸口は文化六年が六〇軒二七一人(『大概書』(三四))であり、文政五年には五七軒二二一人(『文政壬午野作戸口表』)であるので、戸口は前幕府時代に減少してしまっている。後松前藩時代を経過した安政三年には更に減少し、四九軒二二四人(『廻浦日記』)となっている。同四年の戸口は極微の増加で、四九軒二二六人(『入北記』)、あるいは五五軒二二七人(『野帳』)である。

文化六年のコタンは海岸に分布するものがなく、一〇コタンの全てが川筋に分布していた(『大概書』)。安政三年は海岸に三コタン、川筋に一〇コタンが分布していた(『廻浦日記』)。安政四年のコタンは、『入北記』によれば『廻浦日記』と同じであり、『野帳』によれば海岸に一コタン、川筋に一一コタンが分布することになる。

文化六年のコタン戸数の合計は総戸数に九軒不足している。これはコタン記載に洩れるところがあったからであろう。文化二年には海岸に二コタン、ニノコシ(二、三軒)と三石(四、五軒)が記録されている(『東蝦夷地紀行』)。これら二コタンの戸数が、前記の総戸数に不足する九軒に見合うものがあり、あるいはこの二コタンが、文化六年の資料に洩れているのではないだろうか。

川筋での一コタンあたりの平均戸数を見ると、文化期にはミツイ

第十一表　ミツイシ場所コタン・コタン跡一覧

資料	大概書		蝦夷全図	廻浦日記		入北記		野帳(巳年)		戊午日誌	
コタン	戸数	人数	コタン	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数
ニノコシ				3	12	3	12				
カシユシニク				△2,3							
ミツイシ(ヲハフ)			○	2	9	2	9	1	4		
コイトイ				1	8	1	8				
シユツフ				△ 2							
ミツイシ(ミトシ)フト								1	4	1	4
ヒイシユンヒハフ	11			11	53	11	53	4	19	4	19
ウコフシコタン(カムイコタン)				10	50	10	51	13	40	13	40
シヤリシユマ	5			△ 5							
イマニチ	4			△ 4							
ヌフシユツ	10			9	35	9	35			△ 1	
シシヤモナイ								5	22	5	22
ルベシベ	3			△ 3				12	53	12	53
キムンコタンソ								3	17	3	17
ヘシコトリ				△ 1							
ケリマフブト			○	1	6	1	6	2	11	2	11
ハシ子ツフ				1	3	1	2				
ワツカンベツ								2	7	2	7
タフコウ	5			△ 5							
モクロウシ	1			3	16	3	16				
シユモロフト				2	4	2	4	7	33	7	33
ウエン子チ	4			1	8	1	9				
タフカンニ				1				4	14	4	14
クト	5			3	10	3	11				
シヨナイ	3			2	10	2	10				
モヒラ								1	3	1	3

シ川筋が七軒、ケリマフ川筋が四軒であった(『大概書』)。安政期にはミツイシ川筋が六軒、ケリマフ川筋が三軒であった(『戊午日誌』)。(三五)何れの川筋でも安政期の平均戸数が一軒小さいが、小数点以下の四捨五入によるもので、内実は変化なしと考えて良い微減である。

文化期の住民の生活は、春には「海浜に出て釣物をなし」、夏には「生海鼠を引、昆布を刈」というものであるが、彼らが海漁に従事する主な場所は、番屋が置かれているニノコシ、ウラリで、「夏四月頃より罷越、秋七月末に引払」のである(『大概書』)。そこでの海漁の対象はニノコシでは昆布、ウラリでは鱈、カスベ、昆布である(『東行漫筆』)。

秋は「ミツイシ川、ケリマフ川にて鮭を取、食糧貯、余分は干立荷物に出す」であり、冬は「山家に帰り漁船、網を拵へ、女はアッシ、キナ筵を編み」であった。また、「漁業手透の節は粟、稗を作り」であった(『大概書』)。

安政期の住民の生活は、『東蝦夷地場所請ヨリ申上』によると、天保年中までは春になると、鱈、鮪の釣りものであったが、近年は「一切漁事無」ということである。この釣りものに代わる労働は、本場所では不明であるが、両隣の場所を見ると、「薪切出シ、又ハ道、橋普請ヲ仕候」であるので、これと同じ労働であったろう。夏には煎海鼠、鰯漁、そして昆布取であった。この海漁に従事する主な場所は、「雇蝦夷小家」が置かれていたケリマフ、シリイト、ヘセハケ、ヲハフなどであったろう。秋は鮭漁で、文化期と同じくミツイシ川、ケリマフ川で行っていたが、「蝦夷食料丈ケ有」で、食料以上の鮭は

得られなくなってしまっていた。冬には鷹猟、鹿猟を行っていた。

安政五年、春夏の労働のためコタンを離れる者は、遠藤論文によると、川筋住民の七九%にもなっている。これを川筋別で見る（前場所にならない数字のみ記す）と、ミツイシ川筋が三八軒中三一軒、一五五人中一〇九人、七〇%である。ケリマフ川筋では一六軒中一五軒、六八人中五四人、七九%である。

（一二）　ウラカワ場所

戸口は文化七（一八一〇）年六五軒三七四人（『大概書』[三六]）、文政五年が七五軒三二七人（『文政壬午野作戸口表』）、安政三年が九〇軒四五七人（『廻浦日記』[三七]）、同四年が九〇軒四六七人（『入北記』）、同五年が一〇七軒五五九人（『野帳』）である。戸口は文化から文政、安政へと順次増加している。

コタンは、文化期には海岸コタンがない。一三コタンの全てが川筋に分布している。安政三、四年には海岸に一コタン出現しているが、他の一三コタンは全て川筋に分布している。同五年は『野帳』と『戊午日誌』[三八]とを併用して見ることにするが、同三、四年と同じく海岸に分布するのは一コタンのみで、他の一五コタンは川筋に分布している。

複数のコタンが分布する川についてのみ一コタンあたりの平均戸数を見ると、文化七年のウラカワ川五軒、ホロベツ川が五軒、安政五年のウラカワ川六軒、ホロベツ川が九軒である。なお、安政五年のホロベツ川筋にはシヤマニ場所アイヌのコタン（四軒二六人）があるが、それを含めると平均戸数は八軒となる。

本場所の川筋にも、サル川筋ほどではないが、戸数の大きいコタンがあり、一〇軒以上のものが全体で六コタンある。内訳はウラカワ川筋に三コタン、ムコベツ川筋に一コタン、ホロベツ川筋に二コタンであるが、これらの川筋には鮭が遡上し（『大概書』）、コタン住民の冬分の食料確保に困難はなかった。

文化期の住民の生活を、『大概書』によって見ると、彼らは、まづ「二、三月より妻子を連て浜辺へ出、小屋を建」てるという。彼らが小屋を建てる所はどこであったのだろうか。彼らが居住する川の河口部だったのであろうか。当時、イカンタイ、シリエンロモに番屋が置かれていた。そこは「番人壱人宛差添夏四月頃より罷越、秋八月中引払」う所であったが、彼らが小屋を建てる所は、この番屋の所在地だったのであろうか。この点については、『大概書』は何も記していないが、春は「椎茸を取り、鱒、を釣、女夷は喰物に相成草類杯を取り飯料を貯」え、四、五月頃には「鮫、煎海鼠を取」り、六月頃より「男女とも昆布を取」るのであった。

秋九月末頃になると、彼らはそれぞれのコタンへ「妻子不残罷越候て、川え登候鮭を取り、干揚飯料を貯置、其余は荷物に出し…中略…アッシを織、又は楡皮を以、年中漁業の網等を拵へ、又は漁船を作り杯して山に越年致」すのである。

安政期の住民の生活を、『東蝦夷地場所請ヨリ申上』によって見ると、春は「鱒漁、先年迄相応ニ有之候得共、近年二至一切漁事無御

第十二表　ウラカワ場所コタン・コタン跡一覧

資料	大概書		蝦夷全図	廻浦日記		入北記		戊午日誌		野帳	
コタン(跡)	戸数	人数	コタン	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数
ウラカワブト		1	○		1						
ウンケトイ								2	8		
ヒラキウカ				4	21	5	26	3	16	5	24
ヌンヘトウ	3			△ 3							
トクミンタラ				13	54※	13	53	5	22	14	61
ルモウシ								5	22		
イチヤヤ、								4	17		
フウレトウ	4			△ 4							
ウエンコタン	2			△ 3							
トルケシ	3			2	8	2	9			3	15
エハトル	5			3	15	2	15	2	11	2	11
ユウルシ				4	26	4	27				
ケナシトマツフ	3			△ 3							
ライベツ								4	27		
ア子サラ	4			2	11	2	12	10	39	11	51
イカベツ	8			10	55	10	58	13	71	13	71
ヌブカ	9			11	54	11	54	13	76	13	76
イカンタイ				△ 2							
ムコヘツブト											
シリトナイ	9			△							
タツコベワシ				9	50	10	53	10	58	10	58
ウロコベツ				7	38	6	35			7	46
チノミ				3	15	3	15			3	18
シリエンルモ				△							
ホロベツフト								1			
マサブロク								4	26		
ヲホナイ				10				11	61	11	61
バラトウ	4			10	52	10	52	△			
トメナ(マツリシメナ)	3			10	49	10	49	13	57	13	57
シヤリヌキ								○			
ヘケレメナ	8			2	9	2	9	2	10	2	10

備考　※：シヤマニ場所アイヌ

座候。依テ春中ハ薪伐出シ、又ハ道橋普請ヲ仕居」るのであった。夏は「海鼠ヲ引」、入梅前後から七月頃まで「鰯漁」に従事し、昆布は「例年土用入ヨリ刈取仕、八月中旬仕舞ニ相成」るのである。

秋の鮭漁は「立冬比ヨリ網卸仕、大雪之比末漁ニ相成」るという。冬は「鹿猟」であり、「明春正月下旬比迄猟事仕」るのであった。

安政五年、二、三月から八月の中旬頃までの、海岸の労働に従事してコタンを離れていた者は、遠藤論文によると、七一%であるという。川筋別のそれを見る（数字のみ記す）と、ウラカワ川筋六五軒中五八軒、三〇九人中二五五人、八三%である。ムコベツ川筋では一〇軒中九軒、五八人中四二人、七二%である（『戊午日誌』）。

（一三）シヤマニ場所

『大概書』[三九]によると、文化七年の戸口は二六軒一三九人、コタンは海岸に分布するもの一、川筋に分布するもの三である。川筋はウンベ川筋に一コタン、シヤマニ川筋に二コタンである。海岸の一コタンはホロマンベツであるが、それには「川守住居あり」と記されているのみで、戸数が記されていない。

各コタンの戸数合計は一一軒であり、総戸数に一四、五軒ほど不足している。他の資料によると、寛政三年はブユカシマが四、五軒、ニカンベツが「蝦夷人住居」であり（『東蝦夷地道中記』）、文化二年はウトマンベツが四、五軒、キリシタンナイが五、六軒であった（『東蝦夷地紀行』）。これらの資料によると、『大概書』でのコタンの記載には、海岸コタンが洩れているようである。

安政三年の様子は、戸口二八軒一八一人、コタン数八である。コタンの分布は海岸に五、シヤマニ川筋に三である（『廻浦日記』）。同四年は戸口二八軒一八三人、コタン数は八で、前年と同じである（『入北記』）。

本場所のコタン跡は少なく、わずかにコトニ（『廻浦日記』）とヲタフンベ（『戊午日誌』）の二ヶ所のみである。その一つ、ヲタフンベは安政四年までコタンとして記録されている（『入北記』）が、五年には、「近頃…中略…ヲタフンベの土人、此川すじ(引用者註　ウラカワ場所ホロベツ川筋）に入りて住するものまた有るなり」（『戊午日誌』）[四〇]ということで、住民（四軒二六人）はホロベツ川筋マサブロクへ移住してしまったのである。

文化七年の男の生活は、春は「海浜え出釣物をなし」、夏は「昆布を刈」り、秋は「ホロベツ川入会にて鮭を取喰料に貯」え、冬は「山家え帰り、漁船、亦は網を掛へ」である。女の生活は、春は「海浜え出、布海苔を取」、夏は「昆布を刈、手透には…中略…厚しを織、又すだれを編み」である。春より秋までの漁業の「手透には男女共に粟、稗を作り」である（『大概書』）。

安政期の生活は、『東蝦夷地場所請ヨリ申上』によると、隣場所ウラカワの生活と一字、一句も変わらないものであった。

安政五年、シヤマニ川筋のコタンでは、海岸の労働に従事する者が多く、一〇〇人中九三人、九三%もの者がコタンを離れていた（『戊午日誌』）。

第十三表　シヤマニ場所コタン・コタン跡一覧

資料	大概書		蝦夷全図	廻浦日記		入北記		成午日誌	
コタン(跡)	戸数	人数	コタン	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数
ウトマンベツ				5	32	5	36		
ヲタフンベ				4	26	4	27	△	
ホンウンヘ	2								
キリイカンナイ				1	5	1	5		
シヤマニベツ(ブト)			○						
ヲコタヌシ	4			3	16	3	16	3	16
ヲシヤラツケ	4			7	56	7	52	7	56
ルチシホク								4	28
ヘトカ				4	28	4	29		
ヒラウトルツ				3	11	3	11		
モンベニツ				1	7	1	7		
コト				△					
ホロマンベツ	○								

(一四) ホロイミツ場所

『大概書』[四一]は、文化六年の戸数四五軒一七七人を記すのみで、コタンについての記載はない。第一四表には、場所の戸数四五軒一七七人をホロイツミに記してあるが、それは会所が置かれ、場所の中心地と目されるホロイツミ以外に記すところがないと考えた便法に過ぎない。

寛政三年にはニカンベツ(蝦夷人住居)、シヤクコタン(二、三軒)、ホロイツミ(七〇人)、アブチ(三軒)、ショウヤ(二軒)などの五コタンが記録されている(『東蝦夷地道中記』)。同一〇年にはニカンベツ(四軒)、シヤクコタン(二軒)の二コタンが記録されている(木村『蝦夷日記』)。文化二年には、アベヤキ(川筋に二二、三軒)、ヌツチナイ(三軒)、ホロイツミ(三、四軒)、ニケフシ(四、五軒)などの五コタンが記録されている(『東蝦夷地紀行』)。

安政三年の戸口二六軒一一〇人(『廻浦日記』)、同四年の戸口二七軒一〇六人(『入北記』)である。これは、当時、東蝦夷地最少の戸口である。

安政期のコタンについては、三年のコタン数が六、分布は海岸に四、川筋に二(『廻浦日記』)であり、四年のコタン数が九、分布は海岸に七、川筋に二(『入北記』)である。

安政三年、六ケ所のコタン跡が記録されている(『廻浦日記』)が、そのすべてが海岸にある。コタン跡のコタン時代は、ニカンベツが寛政期、ヌツチナイ、ニケフシ、サルゝなどが文化期であったことが、前記資料によって知ることができる。他のコタン跡については不明である。

文化期の住民の生活は、春夏は「海辺に出、小屋を建、魚類、布海苔、昆布を取」るのであり、秋は「漁業貧しく相成候へは毎日の拾い昆布を致し」であった。冬は「山中へ引籠り」であるが、「霜月頃より翌年正、二月頃迄は食物に不自由成場所故、元夷人共受会にて鮭を取候ホロベツと申所川(引用者註 ウラカワ場所ホロベツ川)へ男女共ら罷越候に付、銘々居宅には老人ともを残し置守居為致、其上妻子を引連れ…中略…ホロベツえ冬分の暮し方に罷越、□迄には不残罷帰る」のであった(『大概書』)。

安政期の住民の生活は、「春三月上旬ヨリ鱈釣、布海苔江掛リ、四月中迄ニ取仕舞」、「五月上旬比ヨリ鰯漁手配仕」、「六月土用入ヨリ

第十四表 ホロイツミ場所コタン・コタン跡一覧

資料	大概書		蝦夷全図	廻浦日記		入北記	
コタン(跡)	戸数	人数	コタン	戸数	人数	戸数	人数
ニカンベツ				△			
ホンウエンコタン				△ 5			
アベヤキ				3	10	3	11
ヌツチナイ				△ 1		1	2
コエンルニンカ				4	14	4	15
ホロイツミ	45	177	○	2	10	4	14
ニケフシ				7	41	3	12
ホンモヨロ				△ 3			
コルフル				△ 2		2	9
ケレフシ						1	7
モセウシナイ				3	6	2	4
ヨー				7	29	7	29
シサル			○				
				△ 5			

浜中一円昆布竿卸シ取物ニ相成、九月中浜仕舞仕」、「冬分相成候得ハ夷人共鹿猟ヘ掛リ、正月中ニテ右猟モ相仕舞」であった(『東蝦夷地場所請ヨリ申上』)。この安政期にも、冬には山に引き籠もり、また、ホロベツ川へ鮭漁の出稼ぎに行っていたのか、どうか、それについては記されていない。

文化期、本場所の住民は海辺に夏の家、山に冬の家を持っているが、山の冬の家は「夏冬とも其所を本小屋と致し」(『大概書』)であった。安政期には、「五、六十年前始めて夷村となりしと」(『廻浦日記』)というヲタベツ川筋モセウシナイを除くと、本場所のコタンは、皆海岸に分布している。文化期から安政期にかけての間に、コタンの分布は山から海岸へと一変してしまったことになる。

文化二年のアベヤキは、「此川に添夷家二十二、三あり」(『東蝦夷地紀行』)である。寛政三年のニカンベツは、「広渓間にて蝦夷人住居す」(『東蝦夷地道中記』)であり、また、後には、「此辺の土人は昔は皆ニカンベツの川上に住して、浜へは一向なかりし由。只漁猟の節出稼のみ出しとかや」(『廻浦日記』)と記されている。『大概書』がいう山の家、コタンはこれらの川筋にあったのであろうか。

むすびにかえて

「はじめに」で触れたように、本稿で得られた知見のみについて記すことにする。

コタンの分布は、シラヲイ場所以西の地域が海岸型の、そしてユウフツ場所以東が内陸型の分布を示している。これらの分布型の何れが原初的であったのであろうか。安政期の資料によると、たとえばヤムクシナイ場所でのように、コタンが川筋から海辺へ移動するのが一つの傾向として認められるかのようである。そのような例は、未観察の他の各場所でも散見することができるので、内陸型が原初的であるように思われるが、実際には、そう単純なものでもないようである。

というのも、海岸型の分布を示す地域でも、コタンは鮭鱒の遡上するしかるべき川の端にあるのが一般的であり、そのコタン住民の生活は、夏から冬にかけての食料確保という面で鮭鱒漁とは切っても切れない関係にあり、鮭鱒漁の豊かさの程度が、川筋住民の多少を、あるいはコタンの分布を決める要因であるとも考えられるからである。この川漁の豊かさの程度がコタン分布を決める要因であるとすれば、全てのコタン分布を川筋型、あるいは河川型として捉えることもできるし、海岸型、内陸型という類型そのものが意味を持たなくなるかもしれない。

ともあれ、河川との関係でコタンを見ると、海岸型のコタン分布を示す地域には、シリベツ、シツ津、トシベツの三川を除いて、これといった長大な川がない。これらの地域で、川筋に、すなわち内陸部にコタンが少ないのは、長大な川がないことと関係があるのではないだろうか。厳密に見れば、例外がありそうであるが、大観すれば、鮭鱒が遡上する川では、この流路延長の長短が、したがって流域面積の広狭も関係することになるが、コタンの多少と密接に関

係しているように思われる。

かりに、流路延長二〇キロメートルを基準にして海岸型の分布を示す地域の河川を見ると、それを超す川はユウラツフ、ヲシヤマンベ、ヌフキベツ、ヲサルベツ、シキウ、シラオイ、シヤタイなどの川である。これらの川で複数のコタン（コタン跡を含む）が分布しているのはユウラツフ、ヲシヤマンベのみである。これに対して、内陸型のコタン分布を示す地域の川にはこの基準を超すものが多い。

内陸型のコタン分布を示す地域を、この二〇キロメートル以下の川で複数のコタン（コタン跡を含む）を有するものということで見ると、ムコベツ、ヲタベツの二川のみであるが、ヲタベツは日高と十勝をつなぐ道路が新設されてからのコタン（『廻浦日記』）、いわゆる強制コタンと考えられるものであり、自然発生的なコタンと考えられるものを持つのはムコベツ川のみとなる。

海岸型の地域では、少しばかり長大な川でも川筋に添ってコタンが分布しない傾向があり、内陸型の地域では、多少短小な川でも、川筋に添ってコタンが分布する傾向があるように思われるが、しかし、内陸型の地域でも、余りにも短小な川では、複数のコタンを持つものが少ない。流路延長の長短、流域面積の広狭などと川筋のコタンの多少とは、大まかなところでは関係しているようである。

海岸型、内陸型、何れのコタン分布を示す地域でも、文化期以降の彼らの生活を見ると、住民自身のための海漁は、日々の食料を和人漁業によって支給されるためか、彼らの本来の海漁を知ることができない。内陸型のコタン分布を示す地域では、たとえばユウフツ場所が典型であるが、海漁を必要としていなかった。しかし、川漁は何れのコタン分布を示す地域でも不可欠のものであった。これらのことを見ると、コタン住民は和人の海漁に従事しながら、いわゆる川筋の民になりきっていたのであり、川漁、ことに鮭漁に依存してコタンが分布していたように思われるのである。

川漁を鮭漁だけに絞ると、この関係はより明らかになってくる。川筋のどこまで鮭が遡上するのか、記録があるものについていえば、コタンは鮭の遡上限界を超えて分布していることはほとんどない。多くのコタンは、鮭の遡上限界以下に分布しており、その限界から幾らかの距離を置いた下流に分布している。限界ぎりぎりに分布する例は、わずかにニイカツフ川筋で見られるだけである。いいかえれば、海岸型、内陸型の何れのコタン分布を示す地域でも、コタンの分布は鮭の遡上限界内にあるということになる。この鮭の遡上限界とコタンの分布との関係は、他の未考察の場所でも変わることがないといってよい。

強制コタンについてであるが、和人の強制によって、成立したと見られるようなものは案外に少ない。おそらく、ホロイツミ場所のモセウシナイはその数少ない例ということができそうである。ウスタ場所のモンベツ、イマリマリフ、ヲヒル子ツフ、チマイベツ、そしてホロイツミ場所のアベヤキなどは、成立の新しいコタンであるが、住民の意志で移動した可能性もあるわけで、現資料からは何ともいい難いところがある。

ただ、かつての自然発生的なコタンが核となり、規模が拡大した

という意味の強制コタンなら、他にもう少し例がある。たとえばヤムクシナイ場所のヲシヤマンベ、アブタ場所のフレナイ、ウス場所のウス、モロラン場所のモロラン、ホロベツ場所のホロベツ、シラヲイ場所のシキウ等々がそれである。しかし、これらに対して、和人の影響がどの程度あったのかを知ることは難しい。和人の影響の有無を知る証拠は仲々に得難いのであるが、これの議論は最終稿に譲ることにしたい。

〔追記〕 本稿の作成にあたって、本学の羽田野正隆先生の貴重なる御助言をいただいた。ここに記して謝意を表します。

引用文献

(一) 『竹四郎廻浦日記』上・下巻、北海道出版企画センター、昭和五三年
(二) 『丁巳東西蝦山川地理取調日誌』上・下巻、北海道出版企画センター、昭和五七年
(三) 『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』上・中・下巻、北海道出版企画センター、昭和六〇年
(四) 「東蝦夷地山越内場所村鑑」『新北海道史』第七巻五一五～五一九頁
(五) 『廻浦日記』巻の三〇
(六) 松浦武四郎安政五年『野帳』、松浦一雄氏蔵、国立史料館寄託
(七) 『丁巳日誌』第二三巻「由宇羅津布日誌」
(八) 『丁巳日誌』第二二巻「報登宇志辺津日誌」
(九) 児玉作左衛門「デ・アンジェリスの蝦夷国報告書に就て」『北方文化研究報告』第四輯一九四一
(一〇) 足利健亮「東蝦夷地における和人と蝦夷の居住地移動」『人文地理』二〇巻第一号、一九六八
(一一) 「阿武多場所様子大概書付」『新北海道史』第七巻五二〇～五二四頁
(一二) 佐々木利和「強制コタンの変遷と構造について」『法政史学』第三〇号、一九七六
(一三) 『日本庶民生活史料集成』第四巻所収
(一四) 『丁巳日誌』第一九巻「報志利辺津日誌」(上)、第二〇巻「報志利辺津日誌」(下)
(一五) 『戊午日誌』第一巻「東部作発呂留宇知之誌」(上)
(一六) 「宇寿場所様子大概書」『新北海道史』等七巻五二五～五二九頁
(一七) 『廻浦日記』巻の二九
(一八) 『丁巳日誌』第一八巻「於沙流辺津日誌」
(一九) 「江友場所大概書上」『新北海道史』第七巻五二九～五三〇頁
(二〇) 「母依別場所様子大概書付」『新北海道史』第七巻五三〇～五三一頁
(二一) 『増訂松前蝦夷地場所請負制度の研究』慶文堂書店、昭和四六年
(二二) 「白老場所様子大概書」『新北海道史』第七巻五三一～五三四頁
(二三) 「勇武津様子大概書」『新北海道史』第七巻五三四～五三八頁
(二四) 『丁巳日誌』第一七巻「志古津日誌」
(二五) 『戊午日誌』第三四巻「安都摩日誌」、第三五～七巻「武加和日誌」(上、中、下)
(二六) 遠藤匡俊「アイヌの移動と居住集団」『地理学評論』五八巻一二号
(二七) 「佐留場所大概書」『新北海道史』第七巻五三九～五四三頁
(二八) 『廻浦日記』巻の二八
(二九) 『戊午日誌』第三九～四二巻「左留日誌」巻の壱～・、第三八巻「茂無辺都日誌」、第四三巻「安津辺都日誌」
(三〇) 「新勝府場所大概書」『新北海道史』第七巻五四四～五四七頁
(三一) 『戊午日誌』第四四、五巻「毘保久日誌」(乾、坤)、第四三巻「安津辺都日誌」
(三二) 「シツナイ場所大概書」『新北海道史』第七巻五四七～五五〇頁
(三三) 『戊午日誌』第五八巻「茂宇辺都日誌」、第五九巻「止毘知也理日誌」
(三四) 「三ッ石場所大概書」『新北海道史』第七巻五五〇～五五二頁
(三五) 『戊午日誌』第五七巻「美登之日誌」、『戊午日誌』第五六巻「計里麻布日誌」
(三六) 「浦川場所大概書」『新北海道史』第七巻五五二～五五七頁
(三七) 『廻浦日記』巻の二七
(三八) 『戊午日誌』第五三巻「保呂辺都日誌」、第五四巻「牟古辺都日誌」、第

五五巻「宇羅加日誌」

(二九)「シャマニ場所大概書」『新北海道史』第七巻五五七～五六二頁

(三〇)『戊午日誌』第五三巻「保呂辺都日誌」

(三一)「ホロイツミ場所大概書」『新北海道史』第七巻五六二～五六八頁